

# ラマルクとラマルキズム

横山輝雄

南山大学人文学部

ラマルク (1774-1829) は、ダーウィン以前にまとまった体系的進論を展開した。その著書『動物哲学』(1809)は、ダーウィンの『種の起源』(1859)に先立つこと 50 年である。しかしラマルクの後には、キュヴィエの天変地異説が支配的になり忘れられてしまった。ラマルクが復活するのは、ダーウィンが亡くなった後の 19 世紀末からであり、「ネオ・ラマルキズム」によってである。その時期にヴァイスマンの「ネオ・ダーウィニズム」との対立図式が設定された。それは獲得形質遺伝を認めるか否かというものであった。その後進化総合説が支配的になるまで、「ラマルクとダーウィン」を進化論における二つの流れとするような科学史の記述もなされるようになった。歴史的にはそれがルイセンコ問題と結びつき、「メンデル・モルガン遺伝学とルイセンコ遺伝学」という「二つの遺伝学」と関係づけられたりした。

1960 年代をすぎると、獲得形質遺伝は実験的に否定されたとして、しだいにラマルクの地位は低下し、その名前も忘れられていった。しかし、最近のエピジェネティクスなどとの関係で、再びラマルクが「復興」しつつあるようにも見える。このようなラマルクの地位の歴史的浮き沈みをどう理解するべきであろうか。

自然科学では人文社会科学と違い、過去の科学者は歴史的顕彰の対象ではあっても、それが現代の学説 (の対立) と結びつけられることはない。コペルニクスやニュートンなどの「生誕 00 年」的な行事がそうである。ラマルクの場合、そうした歴史的顕彰の一つにおさまらないものがあるように思われる。これは、進化論をめぐる議論の特殊性であり、その点は人文社会科学と似ている。

19 世紀の後半に、ネオ・ラマルク主義がまとまった学派をなしたのは、ヨーロッパではなくアメリカであった。ハイアット、コープ、オズボーンなどがその代表者とされるが、彼らは皆古生物学者であった。進化の研究は、遺伝学、発生学、古生物学などさまざまに違った専門分野からなされる。それぞれの研究が、進化のなかの何を明らかにしようとしているのかを自覚しようとする、自分の研究の歴史的に位置づけに関心が向かう。専門分野が自立し他の分野と関係があまりない場合は、単なる先行研究のレビュー以上の歴史的関心はもたれず、過去の人物は顕彰の対象でしかない。しかし、複合的な領域に広がる問題については「歴史の見直し」が問題になる。

ラマルクの場合、当人とその後のネオ・ラマルク主義者が再構成したラマルクとにずれがあることが、現在は分かっている。ラマルクその人の進化論は前進的発達をその中心としていたが、ネオ・ラマルク主義者にとってはラマルクその人にとって周辺的であった、用不要説や獲得形質遺伝説が前面に出されることになった。(これはネオ・ダーウィニズムの側も同様で、ダーウィンその人は獲得形質遺伝を認めていた。)

過去への関心に現代が投影されることは、よくあることであり「ラマルクその人の

正確な歴史的「理解」が重要な関心である必要は必ずしもない。しかし、いくら現代の関心を投影した「再構成」であるとしても、何でもできるわけではない。現代の「ラマルク復興」は何をめざしているのだろうか。Jablonka と Lamb の著書 **Epigenetic Inheritance and Evolution** は、副題が **The Lamarckian Dimension** と題され、その表紙には左右にラマルクとダーウインの肖像がならべられ、かつての「二つの進化論」を思い出させる。その後、Gissis と Jablonka が編集した **Transformations of Lamarckism : From Subtle Fluids to Molecular Biology** は、科学史家も含めた本格的な論集である。こうした「ラマルク復興」の内容は何なのか、それが単に一時的なものにとどまるのか、それともかつてのネオ・ラマルキズムのような大きな流れになるのかは、科学基礎論からみても興味深い問題である。